



瀬田の丘

創刊 1973 年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

年間第 10 主日 B 年 (2024 年 6 月 9 日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：創世記 3 章 9 — 15 節

第二朗読：コリントの信徒への手紙二 4 章 13 節— 5 章 1 節

福音朗読：マルコによる福音書 3 章 20 — 35 節

イエスさまと共に生きる

今日の福音朗読はイエスさまが十二人のお弟子さんたちを選ぶ話 (3 章 13 — 19 節) の続きです。

イエスさまが選んだ十二人は立派な人たちではありませんでした。ガリラヤの貧しい、普通の人々です。彼らはイエスさまと共に生活するため、イエスさまによってあちこちに派遣されるため、そして悪霊を追い出す権能をいただくために選ばれたのです。お弟子さんたちの、この三つの生き方を具体的に教えようとするのが今日の福音朗読の箇所と言ってよいでしょう。お弟子さんたちはイエスさまの身内のようにさせていただき、神の国を伝えるために派遣され、そして、貧しい人々や病気の人々に関わる使命を受けたのです。

今日の福音朗読の箇所を眺めてみると、サンドイッチのような構造が見えてきます。つまり、20 節から 21 節はイエスさまをつかまえるためにやってきたイエスさまの親族のエピソード。31 — 35 節もイエスさまに会おうとしたイエスさまの母親と兄弟たちの話です。その二つに挟まれて、律法学者たちとのベルゼブル論争、そして聖霊の罪についての教えがあります。ベルゼブル論争では、イエスさまはさまざまに譬えでお話しになります。

少し、ていねいに見てみましょう。

20 節：イエスが家に帰られると、

この「家」は、イエスさまの宣教の拠点だったカファルナウムの町にある家のことだと思います。ですから、話の舞台はガリラヤ湖の湖畔の町、カファルナウムです。

21 節：「あの男は気が変になっている」と言われていたからである。

新共同訳聖書はカギ括弧を使っています。つまり、人々がイエスさまは気が狂っていると考えていたように訳されています。しかし、原文の読みようによっては「彼らは彼 (イエス) が気が狂ったと言っていた」ともとることができます。もしかしたら、イエスさまの奇行で驚いていたのはイエスさまの身内の人々だっ

たのかもしれない。

22 節：エルサレムから下って来た律法学者たち

イエスさまの活動が都^{みやこ}のエルサレムまで届いていたのでしょう。そのため、権威^{けんい}ある学者たちが、イエスさまの行い^{おこな}を検証^{けんしやう}しに来たのかもしれない。

22 節：ベルゼブル

元々の意味は「堆肥^{たいひ}の神」、あるいは「糞尿^{ふんにやう}の神」というものだそうです。言葉の由来^{ゆらい}はともかく、ここでは悪鬼^{あくき}の首領^{しゆりやう}と同じ意味で使われています。つまり、イエスさまは悪い霊^{いれい}の力で、人に悪^{あく}さをする悪いもの^{もの}を取り除^{のぞ}いているという言いがかりに近い批判^{ひはん}です。

23 節：彼ら^{かれら}を呼び寄せて、たとえ^{たとえ}を用いて語られた。

イエスさまは、批判^まに対して、真^まっ向^{こう}から立ち向かうのではなく、譬^{たと}えで応^{こた}えます。23－24 節、25 節、26 節、27 節と四つの譬^{たと}えです。最初の三つは悪魔^{さたん}が、自立^{りやく}しているのではなく、お互いに拠^よって立^たっていることを教えているようです。ですから、イエスさまがベルゼブルの力で悪霊^{あくれい}を追い出すことはあり得ないのです。そんなことをしたらイエスさま自身^{あや}も危^{あや}うくなるからです。四つ目の譬^{たと}えは、悪魔^{さたん}は自分と一番敵対^{てきたい}するものと組み合うはず^{はず}です。イエスさまが神の子^{かみの子}で一番敵対^{てきたい}する強いもの^{もの}ですから、悪魔^{あくま}の本^{ほん}当^{とう}の矛^ぼ先^{せん}はイエスさま自身^{あや}のはず^{はず}です。ガリラヤの貧しい人々^{ひんしいひとら}ではありません。

28 節：はっきり言うておく

原文は「アーメン」です。イエスさまが何か大切なことを語ろうとするときは必ず「アーメン」で始^はまります。岩波書店^{いわなみ}の訳^{わけ}を見ると「アーメン、私^{わたし}はお前^{まへ}たちに言う、人^{ひと} [間^またち] の子^こらには、すべての罪^{つみ}が赦^{ゆる}されるだろう。[神^{かみ}] を冒^{ぼう}瀆^{とく}するもろもろの冒^{ぼう}瀆^{とく} [まで]」となっています。

29 節：聖霊^{せいれい}を冒^{ぼう}瀆^{とく}する者

聖霊^{せいれい}を冒^{ぼう}瀆^{とく}するとはどういうことなのでしょう。気になります。

31 節：イエスの母^{はは}と兄弟^{けいだい}たちが来て外^{とち}に立ち

印象^{いんげう}的な記述^{きじゆつ}となります。イエスさまの身内^{みうち}は家^{いへ}の中^{なか}に入れ^{いれ}ないのです。ここから、イエスさまが新^{あたら}しい人間^{にんげん}関係^{かんけい}を生^うきていることが伺^{うか}えます。

35 節：神^{かみ}の御心^{ごこころ}を行^なう人^{ひと}こそ

神^{かみ}の意思^{いし}を行^なう人^{ひと}とは、どうい^いう人^{ひと}のことなのでしょう。気になります。

【ちょっと一言】

今日の第一朗読^{だいいちらうよみ}と福音朗読^{ふくいらうよみ}の関係^{かんけい}が難^{むずか}しくて分^わかりにくいです。「どこにいるのか」と尋^{たず}ねる神^{かみ}さまと同じように、群衆^{ぐんしゆ}はイエスさまに会^あいたくて集^あまってきました。イエスさまを捜^{さが}して、それこそ「どこにいるのか」とイエスさまの身内^{みうち}は遠^とい距離^{きより}を歩^あいて来^きました。悪霊^{あくれい}を追い出^おしているイエスさまを懲^こらしめようと、律法学者^{りつぽうがくしや}たちもやってきました。誰^{だれ}もがイエスさまを捜^{さが}し求^{もと}めています。しかし、群衆^{ぐんしゆ}だけが、イエスさまの優^{やさ}しさの中^{なか}に入^いります。なぜなら、イエスさまの言葉^{ことば}とわざをそのま^ま受け入^いれたからです。